

親子のリズム遊びと母子関係

—2003 年度受講者アンケートより—

関 戸 洋 子

(名古屋芸術大学短期大学部)

I はじめに

筆者は未就園児と保護者を対象にした「親子で楽しむリズム遊び」を 1999 年より大学主催の生涯学習講座で開講している。講座は 5 回の連続講座で、内容には親子のスキンシップがとれるものや、家庭内でも親子で遊べるものを取り入れて構成してきた。また、遊びの合間に子どもとのかかわり方などの話を入れ、講座を通して子育てを考えていくように試みてきた。

昨年度の 5 6 回大会では、2002 年度の実践例と、講座を受講するにあたって親に求めたことを報告した。今大会は、2003 年度に実施した講座の概略と最終回に実施したアンケートをもとに、母親のみる子ども像と母親の気持ちを報告する。

II 講座概略

1 実施時期 2003 年 10 月～11 月 (5 回実施)

2 受講者数 親子 11 組

3 受講者年齢 (子ども)

1 歳 3 ヶ月～3 歳 4 ヶ月 (男 9、女 2)

・ 1 歳～2 歳未満児 4 人 (男 3、女 1)

・ 2 歳～3 歳未満児 4 人 (男 3、女 1)

・ 3 歳児 3 人 (男 3)

4 講座実施時間 90 分 (休憩を含む)

5 講座内容

講座の流れは昨年度と同じように構成したが、歌や絵本は違うものを選んだ。また、今年度は太鼓などの楽器をたたく機会を設けた。主な内容は、①始まりの歌②タンブリンで挨拶③準備運動④手遊び歌・となえうた⑤親子で歩く⑥紐を持った遊び⑦歌の付いたペープサート「いないいないばあ」⑧フープを用いた遊び⑨楽器をたたく⑩輪を持った遊び⑪終わりの挨拶、である。なお、⑥紐を持った遊びの後で、10 分から 15 分ほどの休憩をとった。

III アンケート内容と結果

1 質問内容

① 過去の受講経験

② 第 1 回の講座中の子どもの様子と母親の気持ち

③ 子どもの様子と母親の気持ちの変化

④ 受講中に楽しいと感じたこと

⑤ 受講中に苛立ったこと

⑥ 子どもが楽しんでいた遊び

⑦ 家庭内での子どもの様子

2 アンケート結果

(1) 過去の受講経験

本学の講座や地方自治体が主催する「親子のリズム遊び」に類似した講座への受講経験を尋ねたところ、受講経験を有しているのは、3 歳児の 2 名 (男) であり、二人とも一昨年、昨年の同講座の受講者だった。それ以外の子どもたちは今回が初めての経験であった。

(2) 第 1 回の講座中の子どもの様子と母親の気持ち

第 1 回目の講座に見られた子どもの様子と母親の気持ちを尋ねた。

子どもの様子の欄に書かれた内容をみると、低年齢の子どもたちには「戸惑っていた」「ちょっとついていけない」「なかなか離れない」「人見知りがすごい」などの記述があり、その場に慣れるまでに時間がかかる様子が記されていた。年齢が上がるにつれ、「楽しんでいた」「最初はおとなしくしていたが、だんだん慣れて楽しそうに走っていた」など、その場への適応が早くなっていることが読み取れた。

母親の気持ちの欄には、「とても楽しかった」「どのようなことをするのか不安」「内容についていけるか不安」などの母親自身が感じたことを記述した内容のものや、「他の子と仲良くやってくれるかな」「楽しんでもくれるかな」「他の子よりおとなしいので不安」のように、子どもがその場にどのように適応できるかを案じるものが多く記されていた。また、過去に受講経験を持つ 2 人の母親は「楽な気持ちで受講できた」「3 回目でもう少し柔軟に対応できると思ったがそうはいかなかった」と記入していた。

(3) 子どもの様子と母親の気持ちの変化

5 回の講座を通して、子どもの様子に変化を感じた母親は 9 名いた。母親が感じる子どもの変化には、「楽器に興味を示すようになった」「家でも歌をうたうようになった」というように子どもの音楽への取り組みに対するものと、「少しずつ私から離れるようになった」

「楽しんでいる様子が徐々に増えた」など、子どもがその場に徐々に適応していく様子をとらえたものがみられた。

母親自身の気持ちの変化も9名の母親が「あった」と答えている。その記述には、「ゆっくり落ち着いて育児と遊びを楽しもうと思うようになった」「何をするにもこちらが笑顔で接すれば子どもも笑顔になるとわかった」「集団と常に同じでなくてもよいということ・・・」「最初はできなかつたり暴れたりがとても気になったが、次第に気にならなくなった。楽しく過ごせればよいかなと思うようになった」など、子どもとのかかわりに心のゆとりが出てきたように思われる内容が多くみられた。また、「音の出るものを使って遊ぶ方法がわかった」「子どもとの遊び方がわかった」というように、直接子どもとのかかわり方を学んだというものもあった。

(4) 受講中に楽しいと感じたこと

すべての母親が受講中に楽しいと感じていた。「どのような時に楽しいと感じましたか」という質問には、「いつでも」「すべて」というように母親自身が講座を楽しんでいる様子が伺えるものや、「子どもが喜んでいるとき」「表情が生き生きとしているとき」「他の子どもたちと仲良くしているとき」など、子どもの様子から楽しさを感じ取るもの、さらに「一緒に手遊びをするとき」のように子どもと一緒に遊んでいると実感できるときに楽しさを感じるというようなことが書かれていた。

(5) 受講中に苛立ったこと

受講中にイライラすることがあったと答えた母親は11名中3名だった。そして、「どのような時にイライラしましたか」という質問には、「子どもが集中せずに泣いてしまったとき」「先生に近づきすぎて、なかなか後ろに下がってくれなかったとき」「子どもがドアの外に行きたがったとき」と書かれていた。母親は子どもが自分の期待に反する行動をしたり、周りに迷惑をかけていると感じるときに苛立ちを感じたようである。

(6) 子どもが楽しんでいた遊び

子どもが楽しんでいた遊びとして、④手遊び歌・となえうた⑦歌の付いたペープサート「いないいないばあ」⑧フープを用いた遊び⑨楽器をたたく、などが多く挙げられていた。子どもたちは歌が付いた遊びや、体を思いきり動かすことのできる遊び、自分の働きか

けで音の出る遊びを好むようである。また、今回の手遊び歌は各指に顔をつけた手袋を小道具に用いたので、見る要素が多く含まれていた。子どもたちは、ペープサートやこの手遊び歌のように視覚や聴覚から感じ取る遊びも好むようである。

(7) 家庭内での子どもの様子

本講座で取り入れた遊びの中で、子どもが家庭内で繰り返し遊んだものの有無を尋ねたところ、全員が「あった」と答えていた。そして、ほとんどが④手遊び歌・となえうた⑦歌の付いたペープサート「いないいないばあ」だった。

IV 考 察

今回の講座も昨年度と同様に第1回の講座開始時に「子どもが何をしたいのか観察すること」「子どものすることを受け入れること」「子どもと一緒に遊ぶために工夫すること」などを母親にお願いした。なかでも「子どものことを受け入れること」は丁寧に説明を加えた。我が子が皆と同じことをしなかつたり、皆と違うことをすることを受け入れ見守ることは、母親が心にゆとりを持たなければできないことである。そこで、「できる、できない」という尺度で子どもを測らず、子どものしたいことを観察し、そのなかで子どもへの働きかけをするように、受講していただいた。

その結果、5回の講座の中で、受講当初の不安は薄れ、徐々に子どもとのかかわりにゆとりが現れ、リラックスして子どもと遊びを楽しむことができるようになってきたのではないかとと思われる。

また、今回の講座内容も「繰り返し」を重ねてきた。子どもたちが講座中に楽しんでいた遊びや家庭に帰ってから繰り返し遊んでいた遊びのなかで、多く記入されていた⑦歌の付いたペープサート「いないいないばあ」は、歌にあわせて色々な動物などが「いないいないばあ」をするというものである。「いないいないばあ」は何冊も絵本として出版されており、子どもたちにはなじみの深い絵本のひとつであろう。今回は1回の講座に、およそ10～12種類の動物を登場させ、登場順序を日によって変えて行った。この遊びは、「ばあ」と顔を見せるところに面白みがある。この面白みに加え、登場順序を変えることで次への期待が膨らんだこと、繰り返し歌を聴くなかで歌をくちずさめるようになったことなどが、好まれた要因ではないかと思われる。